

## アキール・コレクションにおけるスィンディー語資料\*

萬宮 健策\*\*

Sindhi Materials in the Aqeel Collection

MAMIYA Kensaku

### 1. Sindhi language and literature

Sindhi language is spoken by about 30 million people, mainly in Sindh Province in Pakistan and India. It is written in the Arabic script and consists of 52 characters adopted in 1852 by the British and Sindhi scholars and in India it is also written in the Devanagari script.

Sindhi literature can be back to the 10th century, but the language did not have any unified script until the 19th century, and it is said that the golden era of Sindhi literature is the that of the Kalhoras (1701-83) and Talpurs (1783-1843), who had come from Balochistan. Shah Abdul Latif Bhitai (1689-1752), Sachal Sarmast (1739-1829) and Sami (1743-1850) were present in this period.

### 2. Characteristics of the Sindhi materials in the Aqeel collection

The Aqeel collection has about 25 Sindhi materials in total. All the materials were published in Pakistan and it does not have any materials published in India.

Some remarkable materials are as follows;

(1) Beg, Mirzā Qalīc. 1975 (1st. 1958) *Tuḥfat an-nisvān*. Haidarābād: Sindhī Adabī Borḍu.

This is a “tazkirah” of the famous women in Arabia and Central and South Asia written by Mirza Qalich Beg (1853-1929). He translated many books into Sindhi to provide a variety of information to the Sindhi speaking society.

(2) Rāshdī, Sayyad Pīr Husāmuddīn. 1974. *Tazkirah-yi mashāhīr-i Sindhu*. Haidarābād: Sindhī Adabī Borḍu.

Sayyad Pīr Husāmuddīn Rāshdī (1911-82) was a famous historian, who wrote more than 40 books on the history and tazkiras of Sindh. This material includes more than 120 famous Sindhi people, including Mirza Qalich Beg.

(3) Sindhī, Abū Salmān. 1994. *Imām-i inqilābu Maulānā ‘Ubaidullāh Sindhī: shakhṣiyata ain sīrata*. Karācī: Maulānā ‘Ubaidullāh Sindhī Akaidmī

Maulānā ‘Ubaidullāh Sindhī (1872-1944) was a Muslim convert and a political activist who had studied at the Darul Uloom Deoband from 1887-88. This book was published on the occasion of the 50th anniversary of his death. This book includes many kinds of theses on Maulana by Sindhi historians and writers.

(4) other materials

The Aqeel Collection has some catalogues of publications. Two of them are introduced. One is the indexes of the literary magazine “Mehran” and the other is the catalogue of the materials in the library of the Institute of Sindhology, Jamshoro.

Mehran is the literary magazine started in 1955 by the Sindhi Adabi Board. The magazine is the most famous literary magazine of Sindhi literature and culture. This index includes the numbers from 1955 to 1980.

\* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」(課題番号24320017)の研究成果の一部である。

\*\* 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

The Institute of Sindhology is the provincial institution on Sindh and Sindhological Studies attached to the University of Sindh in Jamshoro. The library has many rare materials on Sindh, Sindhi language and culture. This catalogue includes publications from 1900 to 1972.

### 3. Sindhi materials in the collection

The collection of Sindhi materials includes the history and literature of Sindh, which is one of the main interests of Dr. Moinuddin Aqeel. It is notable that a Pakistani scholar has materials in other languages than Urdu and English.

## 1. シンディー語、シンディー文学概説

### (1) 言語略史

シンディー語 (Sindhi) は、新期インド・アーリヤ諸語の1つに数えられる。ウルドゥー語やヒンディー語とは姉妹関係にある。話者人口は、パキスタンおよびインドを中心に約2800万である。パキスタンに約2500万(80%がムスリム)、インドに約300万(ほぼ全員がヒンドゥー)である。

文字の制定は1852年であり、52文字からなるアラビア文字が採択された。分離独立後のインドではデーヴァナーガリー文字も併用されている<sup>1)</sup>。

分離独立後のインドでは、シンディー語を用いる環境がないことから、家庭内言語に留まり、若年層のシンディー語、シンディー文化への関心低下が顕著になっている。

### (2) 文学・文学史概説

シンディー文学は、10世紀ころまで遡ることができると言われるが [Sindhī 1983: 23]、シャー・アブドゥッラティーフ・ビターイー (Shah Abdul Latif Bhitai, 1689–1752) から、サチャル・サルマスト (Sachal Sarmast, 1739–1829)、サーミー (Sami, 1743–1850) の時代が黄金期と言われる。この時代は、シンド史ではカルホーラー朝期 (Kalhora, 1701–1783) およびタールプル朝期 (Talpur, 1783–1843) という、バローチスターンに出自をもつ王朝が、ハイダラーバードを中心とした地域で栄えた時代であった。両王朝ともに文学振興に積極的だったと言われ、カーフィー (kafi)、ワーイー (wai) に代表されるシンディー定型詩が発展した時代でもある。

現代シンディー文学は、パキスタンとインドという背景を異にする地域でそれぞれに発展しているが、表記する文字の差異を超えて、両国でシンド文化を共有する役割を果たしている。

20世紀後半以降の特徴として、英語やウルドゥー語で書くという選択をする作家が増加している点が挙げられる。読者数の多さがその理由の1つだと考えられる。

### (3) シンディー語出版の状況

では、現代のシンディー語出版の状況を国別に見ておこう。

パキスタンにおけるシンディー語出版の中心は、カラチ、ハイダラーバード、サッカールである。中でも、シンディー文学協会 (Sindhi Adabi Board) やシンド学研究所 (Institute of Sindhology) があるハイダラーバードでの出版が活発である。1852年に制定された52文字のアラビア文字を使用している出版が多いが、近年シンディー文学協会からはデーヴァナーガリー文字による出版も見られ始めている。

なお、1981年パキスタン国勢調査の結果によると、新聞(日刊、週刊、隔週刊)についてもウル

1) 4種の入破音 (implosives) に対し、新たな文字を追加した。

ドゥー語、英語に次いでスインディー語紙の発行部数が多い。

次にインドの状況を見てみよう。インドでは、アラビア文字に加え、連邦政府がデーヴァナーガリー文字使用を推奨しており、世代や地域によって用いる文字に差がある。たとえば、ムンバイやアディプール(グジャラート州)に住む移住第一世代は、アラビア文字による出版を継続する傾向にあるが、デリーではデーヴァナーガリー文字による出版が活発である。出版の中心は、デリー、ムンバイ、アフマダーバード、アディプールという都市である。どの都市にも集住地域がある。

## 2. スインディー語資料概略

コレクションに含まれるスインディー語資料は、実質 25 冊である。冊数は少ないものの、詩人の伝記 (*tazkirah*)、論文集、詩集、旅行記など、内容は多岐にわたる。ただし、パキスタンで出版された資料に限られており、分離独立前の資料や、インドで出版された資料は皆無である。

ここでは、注目すべき資料 4 点を選定し、その解題を加える。

- (1) Beg, Mirzā Qalīc. 1975 (1st. 1958) *Tuḥfat an-nisvān*. Haidarābād: Sindhī Adabī Borḍu. (AQEEL||D||1004||1)

ミールザー・カリーチ・ベグ (Mirza Qalich Beg, 1853–1929)<sup>2)</sup> による、アラブ、南アジアおよび中央アジアの歴史上有名な女性を紹介した伝記集である。南アジアからは、ラウシャン・アーラー・ベグム (Raushan Ara Begam, 1617–71. アウラングゼーブ帝の妹) や、ジャハーン・アーラー・ベグム (Jahan Ara Begam, 1614–81. シャー・ジャハーン帝とムムターズ・マハルの娘) など、18 人を紹介している。

- (2) Rāshdī, Sayyad Pīr Husāmuddīn. 1974. *Tazkirah-yi mashāhīr-i Sindhu*. Haidarābād: Sindhī Adabī Borḍu. (AQEEL||B||808||31)

スインド地方の聖者および有名人列伝である。124 人の聖者等がスインディー語アルファベット順に並んで紹介されている。中には、(1) の著者であるミールザー・カリーチ・ベグも含まれている。

著者ピール・フサームッディーン・ラーシュディーン (Pir Husamuddin Rashdi, 1911–82) は、ラールカーナ生まれの歴史研究者。歴史や伝記をはじめとして 40 冊以上の著作がある。

- (3) Sindhī, Abū Salmān. 1994. *Imām-i inqilābu Maulānā 'Ubaidullāh Sindhī: shakhshiyata ain sīrata*. Karācī: Maulānā 'Ubaidullāh Sindhī Akaidmī. (AQEEL||A||408||63, AQEEL||A||1405||48)

モウラーナー・ウバイドゥッラー・スインディー (Maulana Ubaidullah Sindhi, 1872–1944) の没後 50 年を記念して発刊された記念論文集である。スインド人歴史学者、文学者による寄稿だが、再掲が多い点が気になる。

モウラーナー・ウバイドゥッラー・スインディーは、スイヤールコート出身で、スイクからの改宗ムスリムである。イスラームへの改宗は 1887 年で、1888 年からデーオバンド学院 (Darul Ulum Deoband) で学んだ。

2) ベグの著作には、諸言語からスインディー語への翻訳も多く、さまざまな知識や情報をスインディー語で提供することに努めた。また、「ズィーナト」に代表される女性を主人公とする小説は、今なおスインド人女性の生き方の参考にされる場合が多い。

- (4) Mangi, Qurbanu. 2004. *Hiku gharī piyāru jī! Jāpāna jo safarnāmo*. Khairpur Mīrs: Dostī Publīkeshanz. (AQEEL||A||408||55, AQEEL||A||1002||8)

本書は、日本の旅行記である。旅行記型紀行文学は、シンディー文学の中で人気があるジャンルで、日本の旅行記を記したシンディー作家は、パキスタン人のアルターフ・シャイフ (Altāf Shaikh) をはじめとして多い。

- (5) 上記以外

上記4点以外にレファレンス資料として価値を有するものとして、以下の2点を挙げておきたい。

- ① 雑誌「メヘラーン」(Mihraṇu) の索引特集 (AQEEL||B||304||12)

「メヘラーン」(インダス河の旧名から引用) は、シンディー文学協会 (Sindhi Adabi Board: スィンド州教育局が管轄する機関。1955年設立) が発行する1955年創刊の文芸季刊誌で、シンディー文学界ではもっとも有名な文芸誌の1つである。コレクションに含まれるのは、1955年創刊号から1980年に発行された号までである。

- ② スィンド学研究所 (Institute of Sindhology) 図書館所蔵図書・雑誌カタログ (AQEEL||D||601||19)

スィンド学研究所は、1964年にスィンド大学に設置された研究機関(1962年に設置された Sindhi Academy をもとに改組)。スィンド学 (Sindhology) という名称を初めて用いた、パキスタンにおけるスィンド学研究の中心機関である。附属博物館が充実しており、所蔵する文献資料や音楽資料の豊富さは特筆すべきである。

スィンド学研究所の出版物には、英語、シンディー語、ウルドゥー語によるものが含まれており、歴史学、社会学、言語学などの人文系分野に限らず、動物学、植物学、地質学など多岐にわたっている。本カタログが扱っているのは、1900年から1972年までに出版された書籍、雑誌である。

本稿で取り上げなかったシンディー語資料には、文学作品、国際会議プロシーディングスなどが含まれている。

### 3. 結びに代えて

以上見てきたように、アキール・コレクションに所蔵されるシンディー語資料は、その数は少ないものの、アキール博士の関心が強い歴史や文学に関するものが揃っている。自分の関心分野であれば、それがどの言語で書かれたものであっても、網羅的に収集するという同博士の資料に対する態度の表れであろう。

インドで出版された資料が含まれていないなど、シンディー語文献資料として見ると、片寄りがあると言わざるを得ないが、ウルドゥー語が研究の中心であるパキスタン人研究者が地方語の文献を所蔵しているという点に限っても、特筆すべきであろう。

#### 参考文献

Sindhī, Meman Abdulmajīd. 1983. *Sindhī adab kī muxtasar tāriḫ*. Jāmsoro: Insṭīyūt āf Sindhālājī, Sindh Yūnīvarsitī. (in Urdu)